377)　桜散らしの雨が降る

帰らぬ日々を悼(いた)むよに　桜散らしの雨が降る
水に漂(ただよ)う花びらは　黒留(くろと)め袖(そで)の裾(すそ)のよう
去年の女(ひと)から便りなく　想い出つれて佇(たたず)めば
忘れかけてた愛(いと)しさが　春の匂いに目を覚ます

青春の日を惜しむよに　桜散らしの雨が降る
愛する女とひとつ傘　歩いた日々は夢の中
夢中の季節(とき)はいつか過ぎ　少し疲れた足跡を
桜の花が追うように　白いレースに埋めてゆく

春の眠りを起こすよに　桜散らしの雨が降る
心の奥にしのびこむ　この美しき花もよう
行方も知れずあてもなく　ひきずるように影はゆき
遠回りして帰る道　君の名前を呼んでみる

古い記憶を消すように　桜散らしの雨が降る
時空(とき)の彼方はいつの日も　後悔という物語
哀しいほどに絶え間なく　季節は走り時刻(とき)はゆき
人の心は浮き沈み　恋は弾けてかえらない